

# Adieu et Bonjour / Hikaru Hasegawa

## ライナーノーツ (文・長谷川光)

1970年代中頃の高校生の時からの趣味でしたが、自分の演奏を多重録音して作品をいくつも残しています。それがライフワークになるのは、1990年にTASCAMの16chミキサー付き卓上型8chマルチトラック・カセットデッキを手に入れたのが事の始まりでした。まずは手始めに自身のバンジョー・ソロアルバムの製作に取り掛かりました。それは、1992年の春には完成し、SHOW BY BANJOのタイトルでリリースしました。後に、SHOW BY BANJOは米国Chicago Tribune紙でBEST 10ブルーグラス・アルバムに選出されるという栄誉をいただきました。

その勢いで、当時組んでいた営業バンドのデモテープなどの録音も行いましたが、大阪の中津というところにあった楽器リペア工房の一角を事務所にして製作をしないかというお

誘いが、たしか1993年の春頃にあり、夏頃にはコンピュータやプリンター一式と、前述のマルチトラックを持ち込み、リペア工房終業後の深夜に毎日コンソコソと打ち込みや録音作業をしていました。仕事としては、関西ローカルなTVコマーシャルの音などいくつか作りました。当時新しく始めた、コンピュータを使ったカラオケ音源の打ち込み仕事は自宅でMIDI音源相手に格闘していましたが、中津の事務所では毎夜暇なので、マルチトラック相手に、当時大変珍しかったマカフェリ・ギターを弾いて、長年の夢だったDjango Reinhardtスタイルの演奏を録音していました。それはDjango没後40年のことでした。まだ日本ではDjango Reinhardtスタイルについての情報がほとんど無く、どんな弦をどんなピックで弾けば良いのかも分からず、MartinのブロンズLight弦を張って、FenderのMediumピックで弾くという、

今では考えられない演奏を録音していました。

Django Reinhardt スタイルの録音がある程度曲数が溜まったところで、当時お世話になっていた、大阪の新進気鋭のちんどん屋さんの小林信之さんをお願いして、ちんどん仕事が終わった夜に事務所まで来てもらって、クラリネットの録音をしていただきました。それが、今回デジタルリミックスしてアルバム *Adieu et Bonjour* に収録した最初の10曲となりますが、1997年頃、アナログリミックスしたものをCD-Rに焼いた私家盤を *Gypsy In Texas* というタイトルで少数リリースしていました。

1995年、神戸に地震があり、大阪エリアでは製作も演奏仕事もかなりダメージを受けましたので、大阪の友人・知人には無言で、1996年1月に東京に移住してしまいました。東京移住後の5年間は基本的に音楽をせずに、コンピュータを使った製作やネットワークエンジニアみたいなことを勉強しながら、生活の足場みたいなところを築きました。それが

2000年頃には悪い虫が湧いて、再び音楽活動をするようになりました。20～30代の頃のように、お金のためになんでも演奏するというスタンスは既に無く、好きな演奏だけをするというポリシーで現在まで20年以上音楽を楽しんでいます。

2002年頃、5弦バンジョーで参加していたブルーグラス・バンドのリーダーが若い嫁さんを娶ることになったのですが、彼女はプロのバイオリニストでジブシー音楽に興味があるということだったので、一緒に新しくバンドを組むことになり、18歳の時からの夢であった Django Reinhardt スタイルのバンドを始めました。そのバンド *Yellow Django Revival* は、メンバーの変遷があるものの、現在でも定期的にライブ演奏を重ねており、このジャンルでは国内現役最古参のバンドになりました。

Django スタイルのバンドを組みましたが、駆け出しのアマチュアバンドのようなコピー演奏をするのを避けて、戦前に Django や

Stephane Grappelliが演奏していたイデオム、つまり既存のジャズ曲とオリジナル曲を自分たちのスタイルで演奏するというところに重きを置きました。そのために2003年頃は、50曲以上にも及ぶデモを、今度はコンピュータを使って録音しました。Django没後50年ということで、ようやく国内でもこのスタイルの音楽が認知され始めた頃です。今回のアルバム *Adieu et Bonjour* には、それらのデモから *Yellow Django Revival* では手付かずの5曲をリミックスして収録しました。

2008年秋に、新宿アコギの会というF穴ギターばかりで古いジャズ曲を演奏するバンドに志願して加入したのをきっかけに、東京のトラッドジャズ人脈と繋がることができ、30代の大阪の頃以来のトラッドジャズ演奏を再開しました。それからは、Djangoスタイル、スイングスタイルと二本立てでライブ活動をしていましたが、2018年頃からニューオリンズ・スタイルのジャズバンドからも、4弦テナーバンジョーでお座敷が掛かるようにな

りました。かつて1980年代最初の駆け出しの頃に勉強して、他では全然役に立たなかったニューオリンズ・ジャズのイロハがまた目の見るとは思いませんでしたが、それも束の間で、コロナ禍にやられ、2021年1月現在、演奏活動は開店休業状態です。コロナ禍の下、有り余った時間とエネルギーを使って、自宅でできる何かを考えた時に思いついたのが、アルバム *Adieu et Bonjour* の制作でした。せっかくなので、再び関わるようになったニューオリンズ・ジャズからのアイデアをDjangoスタイルのギターに載せた2019年・2020年のデモを一曲ずつ収録しました。

Track 1～10は、1993～94年のアナログ録音です。トラックごとにコンピュータに取り込んでアナログ特有のノイズを消しながら、デジタル録音との音質の差異が目立たないように編集したものをデジタルリミックスしました。特に太い弦と薄いピックで弾いたギターの音を最近の細い弦と厚いピックの音に聴こえるようにする編集は苦労しました。

Track 11 ~ 14, 16 は、2003 年頃に Apple の PowerBook G4 Ti というノートブックの内蔵マイクをで録音、BIAS Deck というアマチュア用 DAW ソフトで編集しました。

Track 15 は、2019 年に現行最新システムで録音しました。

Track 17 は、2020 年 6 月にボイスレコーダにクラリネットだけ録音してもらったデータをネットで送っていただき、音質の調整を行い、他の楽器を重ねていきました。今回のリミックスは、デジタルデータを最新のプロ用ソフトウェア上で行いました。

## 収録曲説明

### 1. Danson Avec Ma Guitare

1819 年ウェーバー作のピアノ曲「舞踏への勧誘」をフレンチジャズに編曲しました。1930 年代に Goodman 楽団も同じ手法で自身のラジオ番組のテーマ曲にしていました。

### 2. Gypsy In Texas

旧アルバムのタイトル曲で、ミュゼット音楽

風に作った僕のオリジナル曲です。旧アルバムのコンセプトは、1930 年代にパリの楽団が米国テキサスを演奏旅行したらというものでした。

### 3. Texas Crapshooter

テキサス・フィドル曲をフレンチジャズに編曲しました。東欧からの移民が多かったテキサス方面では、故郷の音楽そっくりの楽曲が数多く伝承されています。ある意味、この演奏はポルカの里帰りかもしれません。

### 4. It Had To Be You

古いジャズ小唄です。ジブシージャズ・バンドで演奏されることが多いです。

### 5. Let Me Call You Sweetheart

美しいメロディはアメリカの古いノベルティ・ソングです。元々がワルツであるため、ミュゼット風に編曲しました。

### 6. Shine

古いジャズ小唄です。御大 Django Rein-

hardt の 1936 年の有名な録音の他、今でもジブシージャズ・バンドで演奏されることが多いです。David Grisman と Stéphane Grappelli のライブ盤に心奪われたブルーグラス・ファンも少なくないでしょう。

## 7. Valse De Kentucky

古いブルーグラス曲にヒントを得て、ミュゼット風に演奏しました。旧アルバムには無かった拙いピオラをセカンド・コーラスにダビングしました。

## 8. After You've Gone

古いジャズ小唄です。御大 Django Reinhardt の有名な 1936 年の録音の他、今でもジブシージャズ・バンドで演奏されることが多いです。ここではアップテンポで。

## 9. Tiger Rag

録音されたジャズ曲としては最も古い曲のひとつです。Django Reinhardt のバンド、フランスホットクラブご重奏団のデビュー曲でもあります。ギター、アコーディオン、ク

ラリネットのアンサンブルというのは、1930 ~ 40 年代にフランスで流行ったスイングミュゼットバンドの特徴です。

## 10. East End Blues

サッチモの古いブルース曲にヒントを得てフレンチジャズとして演奏しました。旧アルバムではイントロのギターソロが巧いかなかったために別のメロディが収められていますが、今回マザーテープに NG テイクを発見したので、デジタルリミックス技術で復活させて差し替えました。

## 11. That's A Plenty

ジブシージャズではほとんど演奏されないレパートリーですが、元はかなり古いピアノ曲で、今日ではディキシージャズのスタンダードとしてよく演奏されます。トラッドジャズメンにはメモリ必須の曲です。

## 12. Get Out And Get Under The Moon

言わずと知れた、日本でも有名な「月光価千金」です。このテイクでは意表を突いてギター

とピアノのデュオで演奏しました。

### 13. Montagne Noir

ブルーグラス・ギター奏者必修のフラットピッキングの名曲、Black Mountain Rag というアメリカの古いフィドル曲を、フレンチなギターのブルースとして編曲しました。

### 14. Struttin' With Some Barbecue

Django Reinhardt が憧れた、サッチモ率いる Hot Five の名演をイメージして、弦楽器によるアンサンブルを重視しました。

### 15. Burgundy Street Blues

ニューオーリンズ・ジャズのクラリネット奏者 George Lewis の素晴らしいブルースの雰囲気大切に演奏しました。Django スタイルのギターとトラディショナルなクラリネットの音使いの共通点を感じることができました。

### 16. Clarinet Marmalade

これも録音されたジャズ曲としては最も古い

曲のひとつで、ディキシー・ジャズやニューオーリンズ・ジャズのスタンダード曲です。バイオリンのピチカートソロを頑張ってみました。

### 17. Si Tu Vois Ma Mère

英訳すると「If You See My Mother」、Sidney Bechet の名曲を、河野義彦さんのクラリネットとギターで演奏しました。